

機関番号：17301

研究種目：基盤研究(C)

研究期間：2008～2010

課題番号：20530831

研究課題名（和文）記述力の変容を促す書字行動及び書字習慣の追跡と分析

研究課題名（英文）Tracking and analysis of writing behavior and writing habits which promote transformation in descriptive power

研究代表者 鈴木 慶子 (SUZUKI KEIKO)

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号：40264189

研究成果の概要（和文）：

本研究は、現在、課題とされている思考力、判断力、表現力などの育成に関わるファクトの抽出を、小学生の書字行動に焦点化して行った。それを、作文評価との連関で解析した。その結果、下記のようなサイクルが見いだされることを実証した。

好きな教科 [意欲] →ノートテイキング(書字行動)→ノートテイキング以外の書く活動(書字習慣)→作文(言葉・考え)→好きな教科 [意欲] →……………

上記サイクルは、今後、ICT化が進行する社会及び学校において、子どもの書字行為をどのように担保するかを考える上で、示唆に富んでいる。

詳しくは、下記の報告書(冊子)を参照のこと。

記述力の変容を促す書字行動及び書字習慣の追跡と分析	
序	(鈴木慶子)
Ⅰ	ノートテイク行動に関する学習心理学的考察(小野瀬雅人) …………… 1
Ⅱ	「書くこと」の連続性 — 「文字」を書く、「文」を書く—(鈴木慶子・吉村幸)…………… 13
Ⅲ	大村はま国語教室における「国語学習記録」の指導の展開とそのねらい(平瀬正賢)……………37

なお、本研究は、現在、基盤研究(B)(一般)「学習基盤を形成する書字力育成プログラムの開発」(代表：鈴木慶子)に引き続いている。

研究成果の概要（英文）：

In this research, we examined the abstraction of facts relating to the recent issue of the fostering of intellect, judgment, and expressive capacity, focusing on the writing behavior of elementary school students. We analyzed the relationship between this and composition evaluation. As a result, we verified that the following cycle was discovered.

Preferred subjects [motivation]→ Note-taking (writing behavior)→ Writing activities apart from note-taking (writing habits)→ Composition (words/thoughts) → Preferred subjects [motivation] →

The above cycle, when considering in which ways children's writing behavior are secured in society and schools which continue to implement more ICT from here on, is rich in suggestions. For more details, please refer to the below report (brochure).

Tracking and analysis of writing behavior and writing habits which promote transformation in descriptive power	
Prelude	(SUZUKI, Keiko)
1] Psychological Consideration of Learning Regarding Note-taking Behavior	(ONOSE, Masato)..... 1
2] Continuity of "Writing"—Writing "Letters," Writing "Compositions"—	(SUZUKI, Keiko/YOSHIMURA, Osamu)..... 13
3] Development of Instruction of "Language Learning Records" at Omura Hama Language School and its Goals	(HIRASE, Masatake).....37

Additionally, this research continues from the current Grant-in-Aid for Scientific Research (B)(General) "Development of Writing Ability Training Programs which Form the Foundation of Learning" program (Representative: SUZUKI, Keiko).

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2008年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2009年度	1,100,000	330,000	1,430,000
2010年度	800,000	240,000	1,040,000
年度			
年度			
総計	3,500,000	1,050,000	4,550,000

研究分野：社会科学

科研費の分科・細目：教育学・教科教育学

キーワード：手書き、ノート、メモ、作文、書字行動、書字習慣、学習意欲

1. 研究開始当初の背景

PISA 調査、教育課程実施状況調査、あるいは特定の課題に関する調査の結果分析から、日本の子どもたちの学力はもとより、学習意欲の欠如が指摘されている。

学力のうち、「書く」力に焦点を絞って考えてみると、「テキストにもとづいて自分の考えを書く力を高めること」が求められており、発達段階をふまえた具体的な指導の手だてが要請されている。

「書く(綴る)」ことは思考することが伴うために、書き手の意志や意欲と大きく関わる、記述式回答の誤答に対してよりも、空欄(未記入)についてのほうに心配が寄せられるのは、このことと関係する。また、「書く(綴る)」ことの出発点となるのは「書く(書字する、書写する)」ことであり、「書く(綴る)」力の向上は、あるところまでは「書く(書字する、書写する)」力とは螺旋関係にあると言われている。

2. 研究の目的

(1) 着想に至った経緯

平成 18 年度に、中学生(800 名程度)を対象に、我々が行った「ノートとメモに関するアンケート」によると、以下の 3 点がわかった。

- ① 各科の授業中にノートを必ず取り、様々な場面でメモ行動を必ず起こすと回答した生徒は、同時に、手書きすることが好きで、勉強以外でも手書きすることが多いと回答している。
- ② ノートの取り方では、板書されたことに加えて、自分に必要なこともノートに書くと回答した生徒は、同時に、手書きすることが好きで、勉強以外でも手書きする機会が多いと回答している。
- ③ ノートを取る時、板書されたことのうち自分に必要なことだけをノート

に書くと回答した生徒は、同時に、手書きすることが嫌い、勉強以外でも少ないと回答している。さらに、各種メモ(連絡、電話、挨拶、情報、ひらめき)もまったく取らないと回答している。

以上の 3 点から推測されることは、「書く(書字する、書写する)」行動を起こす生徒は学習及び自己開発に意欲的であるということである。

平成 18 年度に、中学生(300 名程度)を対象に、我々が行った「メモをとると話がよく理解できるか」の実験によると、以下の 5 点がわかった。

- ① 話を聞くとき、メモを取った群とメモを取らなかった群では、話の内容の理解度を測定するテストの平均値に有意な差があった。
- ② 通常の国語科授業とはまったく関係のない国語テストを行った、その結果、国語テスト得点と話テスト得点の間には、連関がみられた。
- ③ 国語テスト得点上位群、中位群、下位群の、話テスト得点を調べたところ、国語テスト得点の高低に関係なく、メモを取った群は、メモを取らなかった群よりも、話テスト得点が有意に高かった。
- ④ 話を聞く実験の時、メモを取って群は、以下のように、同時に回答している。
 - a. 手書きすることが好きで、勉強以外でも手書きすることが多い。
 - b. 普段の生活でも各科のノートを取ることが好き。
 - c. 各科のノートをとる時は、板書されたことに加えて自分に必要なことも書く。
 - d. そして、見た目、内容、重要さの複

数の点に注意する。

e.ひらめきメモ、情報メモをかならずとる。

- ⑤ 話を聞く実験の時、メモを取らなかった群は、前項④a～eの逆を回答している。

以上の5点から推測されることは、メモ行動は、記憶の補助として有効であり、メモ行動を起こすことは日常の書字習慣が強く連関している。そして、メモ行動やノートの取り方を情報取得の方略としてとらえると、学習者が自分自身の考え方を作り出すことの一步を始めているとみなすことができる。したがって、このことを促進するように教育することで、学習者は思考を伴う「書く(綴る)」ことができるようになるであろうと着想に至った。

- (2) 何をどこまで明らかにするか

「書く(綴る)」ことは、どのような習慣及び意欲によって支えられているのかを探知する。

「書く(綴る)」と「書く(書字する、書写する)」との連続性と岐路を、NIRSによって定量的に明らかにする。

3. 研究の方法

- (1) 「書く(書字する、書写する)」行動、「書く(綴る)」行動及び学習意欲の各ファクトを取り出した。
- (2) 「書く(書字する、書写する)」行動が旺盛な群及びそうでない群の、それぞれの作文を評価した。
- (3) 作文の評価の高い群及びそうでない群の、それぞれの書字行動を調査した。
- (4) 経費の関係で、当初計画していたNIRSを使用した調査を行わないこととした。

4. 研究成果

- (1) 「書くことの好き嫌い」と書字行動・態度、書字習慣との関連について

小2では、「書くことの好き嫌い」と書字活動の好き嫌いが直結している。

高学年になると、教科を超えてノートテイキングの好き嫌い「書くことの好き嫌い」とが強い連関をもつようになる。

このことから、低学年で、書字活動が好きになるような指導が、後に、学習の基本となる良いノートテイキングにつながる可能性があることが推測される。

加えて、興味深いこととして、「書くことの好き嫌い」と読解や音読の好き嫌いとの連関していることがわかった。

- (2) 報告型作文の評価と書字行動

作文の評価と学級の連関が高い、このことは、指導いかんによって、作文力が異なってくることを意味するものと解釈できる。

- (3) 学習意欲と書字行動及び書字習慣

「好きな『書く』活動の数」が多い児童ほど、「楽しみな授業の数」ということが明確である。「楽しみな授業の数」を全般的な学習意欲・関心の現れとだにとらえると、その意欲・関心は、「書く」活動が好きだという気持ちが必要条件になっていると推察できる。

学年別に見ても、「書く」ことが好きな児童ほど、「楽しみな授業の数」が多いという傾向があると言える。その傾向は、2年生から見られ始め、3、4、5年生で顕著となる。

「書く」ことが好きな児童は「好きな『書く』活動」の数が多く、「書く」ことが好きでない児童は「好きな『書く』活動」の数が少ない。このことは全学年を通して同様の傾向がみられる。低学年から中学年にかけて、「好きな『書く』活動」の数が減少する。以

上①～⑥から、学習への意欲・関心が高い児童は、「書く」こと(文字を書いたり文を書いたりすること)が好きであり、授業中にノートをとること以外の、学校でのいろいろな「書く」活動が好きであることがわかった。

(4) 学習意欲と作文文字数

2年生を除いて他の学年では、おおよそ、「楽しい授業の数」が多い児童ほど、作文文字数が多い。年生は、1年生に比較して、飛躍的に文字数が増えている。

「書く」ことが好きな児童ほど、作文文字数が多い傾向がみられる。この傾向は、学年があがるにつれ顕著となる。

全学年を通じて、おおよそ、「好きな『書く』活動」が多い児童ほど、作文文字数が多い。この傾向は、3年生以上で顕著となる。

今後、ICT化が進行する社会及び学校において、書字行為をどう担保するかを考える重要な資料となるであろう。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計5件)

鈴木慶子・林朋美, 視写と聴写に関する基礎調査(1) —意味理解と書字習慣が文字質に及ぼす影響(中学校1年生の場合)—, 書写書道教育研究, 第23号, 2009, 21-30, 査読有り.

鈴木慶子, 複式教育における書写授業—単式書写授業の改善モデルとしての照射—, 書写書道教育研究, 第24号, 2010, 111-116, 査読有り.

田中智生, 教育実習における「話すこと・聞くこと」に関する学び, 日本語学, 第28巻第5号, 2009, 12-23, 査読無し.

鈴木慶子, 吉村宰, 平瀬正賢, 学習意欲と書字行動, 書写書道教育研究, 第25号, 2011, 11-20, 査読有り.

鈴木慶子, 書くことと意欲, 月刊国語教育研究, No.471, 2011, 48-49, 指名.

[学会発表] (計8件)

小野瀬雅人・山本博樹・大野精一・高垣マユミ・藤村宜之・吉田甫, 児童・生徒の理解支援ニーズに応える教材提示のあり方—理論と実践の乖離を超えて—, 日本心理学会第50回総会, 2008, 東京学芸大学.

鈴木慶子・林朋美, 小学生の書字習慣と視写力, 全国大学国語教育学会第114回大会, 2008, 茨城大学.

鈴木慶子・林朋美, 視写に関する基礎調査(1), 全国大学書写書道教育学会第23回大会, 佐賀大学.

鈴木慶子, 複式教育における書写授業を起点として, 全国大学書写書道教育学会第24回大会, 2009, 広島大学.

小野瀬雅人, 支援ニーズから組み立てる学習支援研究—いわゆる「支援ニーズ」の捉えどころ—, 日本心理学会第73回大会, 2009, 立命館大学.

小野瀬雅人, 学習指導における今日的課題とその対応, 応用教育心理学会第24回大会, 2009, 兵庫県私学会館.

鈴木慶子, 吉村宰, 平瀬正賢, 「書く」ことへの態度及び習慣と報告型作文の評価との関連について, 日本行動計量学会第37回大

会, 2009, 大分大学.

鈴木慶子, 吉村宰, 平瀬正賢, 学習意欲と書字行動の関連, 全国大学書写書道教育学会第 25 回大会, 2010, 北海道教育大学旭川校.

[図書] (計 7 件)

小野瀬雅人(分担執筆), 教材学の現状と展望(上), 全 371 頁, 協同出版, 2008.

小野瀬雅人(分担執筆), 学習指導用語辞典(第 3 版), 全 338 頁, 教育出版, 2009.

鈴木慶子(分担執筆), 明解書写指導, 全 135 頁, 萱原書房, 2009.

吉村宰(分担執筆), e ティスティング, 全 269 頁, 培風堂, 2009.

小野瀬雅人(共著), 教科心理学ハンドブッカー教科教育学と教育心理学によるわかる授業の実証的研究。一, 全 206 頁, 図書文化社, 2010.

鈴木慶子・平瀬正賢(分担執筆), 新たな時代を拓く中学校高等学校国語科教育研究, 全 294 頁, 学芸図書, 2010.

鈴木慶子(分担執筆), 中学校高等学校国語科教育法(新版), 全 242 頁, おうふう, 2011.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

○取得状況 (計 0 件)

[その他]

研究成果報告書(冊子); 小野瀬雅人, 鈴木慶子・吉村宰, 平瀬正賢, 記述力の変容を促す書

字行動及び書字習慣の追跡と分析, 全 41 頁, 2011.

6. 研究組織

(1) 研究代表者

鈴木 慶子(SUZUKI keiko)

長崎大学・教育学部・教授

研究者番号: 4 0 2 6 4 1 8 9

(2) 研究分担者

千々岩 弘一(CHIJIWA Kouichi)

鹿児島国際大学・福祉社会学部・教授

研究者番号: 9 0 1 6 3 7 2 4

田中智生(TANAKA Norio)

岡山大学大学院・教育学研究科・教授

研究者番号: 0 0 1 7 1 7 8 6

小野瀬 雅人(ONOSE Masato)

鳴門教育大学大学院・学校教育学研究科・教授

研究者番号: 4 0 2 2 4 2 2 9 0

吉村 宰(YOSHIMURA Osamu)

長崎大学・アドミッションセンター・准教授

研究者番号: 4 0 3 1 4 6 6 1

平瀬 正賢(HIRASE Masatake)

長崎大学・教育学部・准教授

研究者番号: 0 0 4 5 2 8 5 5

(3) 連携研究者

安藤 ハル(ANDOU Haru)

日立製作所・中央研究所・主任研究員

研究者番号: なし